



Title	日本語の時制 : その形式と解釈のプロセス
Author(s)	福原, 香織
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58306
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	福原香織
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 24790 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	日本語の時制 - その形式と解釈のプロセス -
論文審査委員	(主査) 教授 三原 健一 (副査) 教授 仁田 義雄 教授 杉本 孝司 教授 小矢野哲夫 教授 林田 理恵

論文内容の要旨

本研究は日本語の時制解釈の新たな機構を、概念的なレベルと、統語構造レベルの二つの領域において提示することを目的としている。従来とは全く異なる観点からアプローチし、日本語の時制解釈をより簡潔にシステムティックに、統語構造上で説明可能なレベルにまで純化させ、時制形式と時制の意味との対応を体系的に示すことが狙いである。

しかしながら、この構想を具体化するにあたっては、大きな問題がある。日本語の動詞時制形式(ル形、タ形)と時制概念(非過去/過去)が一律の対応を見せていない場合がある、ということである。

日本語において時制をどう捉えるか、ということは(山田1908)、松下(1928)など早い時期から議論され、長い歴史があるが、寺村(1984)により現代日本語の時制形式と時制について、その問題点と基本的な分析方法は提示されているといっている。そしてこれまでに、形態論、意味論、構文論、統語論など研究者の依拠する分析枠は異なるが、数々の優れた研究成果が蓄積されてきている。各々が示唆に富み、また、それぞれが当該の言語事実を説明可能にするものである。本研究は、こうした先達の研究史における成果を否定するものではなく、決してない。しかし、個別的研究に拠る知見が蓄積されて来たものの、日本語の時制解釈のシステムとして、いずれにも完全に依拠することはできない、というのが現状である。その原因として、先に述べたように、日本語の時制形式ル・タの「実体」が判然とせず、環境に応じて複数のことを勘案した上で説明せねばならない、ということが挙げられる。次のようなル・タ形の振る舞いを見ると、このことは明らかである。

- (1) さあ、君はさっさと帰った！あなたは仕事を片付ける！
- (2) 食べる前に、手を洗った。
- (3) 振り向いたとたん、殴られるよ。
- (4) ベルが「鳴る／鳴った」と同時に、全員外へ出る。
- (5) 薬を「使う／使った」実験は、評判が悪かった。

(1)の「帰った(タ形)」、「片付ける(ル形)」は共に文末で命令的に使われる。(2)「食べる」は、従属節述語はル形であるが、文全体は過去のことを意味している。(3)はタ形であるが、文全体で未来(現在時以降)のことを表す。(4)の{ル/タ}形は従属節内で交替可能であり、しかも主節の時制が非過去/過去のいずれの場合でも交替できる。(5)は連体修飾節の一例であるが、この例でも{ル/タ}形の交替が可能であり、主節時制に応じて変わるものではない。(1)～(5)のル・タ形を時制形式とするならば、

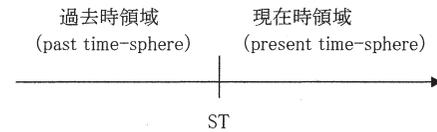
「時制」の枠組みで一貫した説明が望まれるし、時制形式で無いとするならば、例えば動詞の内的時間構造「アスペクト」の枠組みで統一的に説明されることが理想的であるが、日本語のル・タ形に関しては、時制形式かアスペクト形式かのいずれかを初めから定めることに固執すると、統一的説明はまず不可能である。しかしながら、ル・タ形いずれかでならない場合、そしていずれでもよい場合が、確かにある。

現代日本語のル・タ形は、高度に「抽象化」されており、またそれゆえに「多義」であることはよく知られているが、当該のル・タ形が「なぜ」選択されるのかを時制解釈を簡潔に説明するための観点として取り入れなければならない。そのため本研究は大部分を、ル・タ形が当該の文で「なぜ」選択されるのかを、言語事実即して遡及的に検証していく道程となっている。この観点からの全体的な検証は、これまで試みられなかったことである。

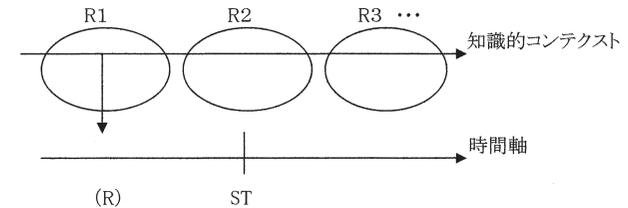
この過程を通じて得たル・タ形の選択原理をもとに、時制解釈の機構を統語構造上で説明することを試みる。本稿の構成は以下のようなものである。

第1章で、先行研究を概観し、本研究の立場と用語などについて明示的に述べ、第2章では、日本語の時制解釈における概念的システムを以下(6)(7)のように提示する。

(6) 時間概念領域(Time-sphere)



(7) 知識的コンテキスト(Epistemic Context)



(6)は、デクラーク(1994(原著Declerck(1991)))のTime-sphereの概念を基本テンプレートとして採用し、本稿が図式化したものである。そして(6)に工藤(1995)の形態的「テンス」と、意味・機能的カテゴリーの「テンポラリティ」を区別する定義を取り入れ、本研究の理念と融合させた基本モデルを(7)として提示する。ここでは、ST(Speech Time)の性質、文の「生産側」と「解釈側」についても議論し、文法規則によるル・タ形式の選択レベルとして、述べ手の「知識的コンテキスト」(Epistemic Context)という概念を勘案することが日本語の時制解釈機構に必須であることを主張する。

第3章では、従属節のル・タ形式に注目するが、その際、特定の従属節や構文による分析はせず、ル・タ形式が固定的に現れるかどうかという観点から検証した。その結果、主節時制とは関係せずに従属節述語動詞の形態化が起こり、同時に動詞の意味も決まる過程をもつ節があり、これらを「整合」という統語操作のもとで一括して扱えることを示す。ここではル・タ形が抽象化しているプロセスの過程を見ることが出来、その抽象化標示を(X[x___])などとして、表にして示した。

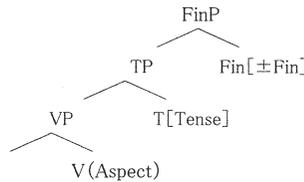
第4章では、主として連体修飾節におけるル・タ形の現れ方を検証した。多くはこれまでに提示された結果を確認することになるが、本研究の結論としては、基本的には寺村(1984)の「装定」と「述定」の概念に従うべきである、ということである。そして、統語理論的には、第3章でのル・タ形の位置づけとあわせ、時制と関係しないル・タ形を「不定形」として扱える可能性があることを、今後の課題と併せて述べた。

第5章において、ここまでの議論から得たル・タ形の選択原理を元に、以下のように結論する。

- (8) ・動詞の語彙的アスペクトは意味素性としてごく初期に照合される。(VPレベル)
- ・確定したアスペクトの意味は上位Tの領域内で時制を帯びる。(TPレベル)
- ・FinPが出現すればTは時制値として確定され、時制文となる。(Finレベル)

これに従い、日本語時制解釈の適切な統語構造を提示する。(9)がその主要な部分である。その際、理論的には一部を三原(2004, 2006)の相対化素性照合のシステムを、全体的にはRizzi(1997)のCP-Layerを援用した。結論として、動詞の随意素性[±Past]と文を成立させる統語素性[Tense]、そして文の定性を決める素性を[Fin]とし、これらを区別することが、日本語の時制解釈にとって欠かせない観点であることを述べた。

(9) 統語構造における日本語の時制解釈



最終的に、本研究の成果が日本語の全ての時制解釈に纏わる現象を説明できるものかどうかは、検証するに至っていない。しかし、ル・タ形式選択の原理的背景を言語事実で確認し、時制概念と時制形式の対応関係を明示的に説明できたことは、今後の日本語の時制解釈研究において、必ず貢献できるものと確信している。

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、ル形・タ形を取る日本語の時制について、主節は絶対時制で解釈され、従属節は絶対時制あるいは相対時制で解釈されるという従来の見解に異議を唱え、認識的視点に基づいて設定される基準点以前にル形を、以降にタ形を振り分けるといった新たなシステムを提唱したものである。そして、モーダル用法など、絶対時制・相対時制の枠内に入り難いとされてきた時制現象をも包括的に捉え、むしろ、これらをプロトタイプとすることにより時制現象を考え直すという観点から、日本語の時制に関する記述的及び理論的分析を展開している。分析の基盤となるテンスやテンポラリティの定義から始め、様々な構文におけるル形・タ形の分布、及び、述定・装定の違いに依拠する修飾節における時制の様相を明らかにし、そして、新たに提案された「整合」の概念によって分析を昇華する各章の流れは、記述的にも論理的にも概ね妥当である。さらに、ミニマリストプログラム(生成文法)の枠組みを用いて主張を浮き彫りにした最終章は、大いに意欲を感じさせるものである。

本博士論文の新機軸は、まず、述べ手(発話者)の「知識的コンテクスト(Epistemic Context)」という概念を導入したことにあるが、このことにより、絶対時制・相対時制から漏れる時制現象を時制論の中で扱うことに(ほぼ)成功している。次に、「整合」という新たな概念の設定が挙げられる。整合とは、後にル形あるいはタ形として音声化される要素が持つ素性と、それに後続する形式が有する素性の一致を司る概念で、ミニマリストプログラムにおけるAgree操作と概念的には近似するものである。

むしろ、どの論文においてもそうであるように、やや不十分であると思われる点は存する。本博士論文は、従来の「形式的なル・タ」ではなく「認識的なル・タ」を分析の基盤とするものであるが、「認識」の中身が十分には敷衍されていない点、不定形(の候補)に関する極めて重要なデータを多数発掘しているにも拘わらず、その分析が十分にはなされていない点、工藤(1995)以前の知見の蓄積で抜け落ちているものがある点、アスペクトをどのように捉えるかに関してやや曖昧さが残る点、そして、依拠する理論的枠組みとして、ミニマリストプログラムではなく構文文法の方が親和性を有す

るのではないかという点などがそれに当たる。

しかしながら、そのような点があるにしても、本博士論文において貫かれている、日本語の時制を新たなパラダイムのもとに記述し理論化するという試みは、十二分に価値のあるものと評価できる。また、全国学会における3回の口頭発表(関西言語学会は全国規模学会として認知されている)や専門雑誌への論文発表を通じて、学会への研究の還元も意欲的に行っている。

そのようなことを勘案し、当博士論文審査委員会は、本博士論文が学位「博士(言語文化学)」に値すると判断し、博士論文の成績を「合格」とした。